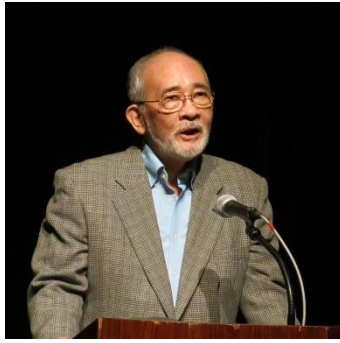


長田紀生トークショー

東アジア『名作戦争映画』上映会

2016年11月03日、四日市で開催した『軍旗はためく下』の上映会後、この映画の脚本家で、地元出身の長田紀生氏によるトークショーを実施した。その一部を紹介する。



面白く見ていただけたでしょうか。面白かったですか？（拍手）ありがとうございます。この『軍旗はためく下』という映画は、ある意味重い映画だし、シリアスな深いテーマを追った作品だと思っています。面白いという言葉には違和感をお感じになったかも知れませんが、僕は映画というものは、すべて面白くなければいけないと思っています。

英語でいうならば、funじゃなくてinteresting、すごく興味を持って心を動かされて、考えさせられる。それが面白いという言葉の非常に大切な意味合いだと思います。そしてその意味で僕は、映画というものはすべからず面白

くなければいけない、と思っています。どんなに深刻な人間にとつてつらく悲しい…ことを描いていても、やっぱりそこにひどく心を動かされる興味を惹かれる、考えさせられる。というような意味合いでの面白さがなければいけないと思っています。映画も文化というものの一端を担っているとすれば、僕は映画だけじゃなくって、文化というものは面白くなくちゃいけないと思っています。

たまたま今日は文化の日です。日本国憲法が公布された日です。昭和21年1946年の11月3日に公布され、翌、昭和22年5月日本国憲法が発布されました。つまり11月3日の文化の日というのは、憲法の日でもあるのです。そこからいけば、僕は憲法も一つの文化じゃないかと思うのです。僕たちの日本国憲法というのは、世界に類のない恒久平和、戦争放棄、決して二度と戦争はしない。それを誓ったとても大切な文化だと思うのです。その文化の日、戦争放棄をうたった日に、今日、この『軍旗はためく下』を観ていただけたことに、僕はとても喜びを感じます。

この映画が作られたのは1972年日本が高度経済成長の道をまっしぐらに進みだしたころでした。もう戦後は終わった、と言われてからずいぶん日が経っていました。田中角

栄という今太閤と呼ばれた人が、総理大臣になりました。日中国交回復がなされました。戦後処理はこれで大方片付いたと、田中角栄は言っていました。この田中角栄を最近再評価する動きが出ています。

例えば、石原慎太郎が「天才」という本を書きました。かつて田中角栄を金と権力の亡者と言った石原慎太郎が今や田中角栄を天才と奉っています。田中角栄という人は、確かに、魅力的なものを持っていたと思います。しかし、彼が、金権政治、つまり、日本人の間に非常に強く金が第一だよ、金さえ持ったら何だってできるよ。金を持った者こそ勝ちだよ。そういう気分と風潮を強く流したというのは間違いない事実だと思います。この映画はそのような時代に作られた映画です。監督の深作欣二は、僕の東映の会社の先輩であり、ある意味では僕の師匠で、反逆精神にあふれた人でした。この映画を撮る前に多くのヤクザ映画を作りました。深作欣二が作ったヤクザ映画というのは、戦後の焼け跡、闇市に戻って来た復員兵たちが、主人公になっているというような映画でした。日本がドンドン戦後復興をして回復をして行く。お金が出来ていく。世の中が妙な方向に出来上がっていく。そういう動きや時代に残り残された男たちのお話なのです。こ

の映画は、その彼が、結城昌治の直木賞受賞作「軍旗はためく下に」に出会い、私費を投じて映画化権を取り、映画化したものです。

この映画で描きたかったテーマは何だったのか、戦争の悲惨さ、それもあるし、戦争の非人間性、もう二度と戦争は嫌だ。いわゆる反戦への思い。それもあつたかも知れないが、しかし、それ以上に、ぼくたちが考えていたのは、戦争そのものより、あの戦争、あえて言えばあの間違った戦争に、きちつとオトシマエをつけていないこの国のあり方だったように思います。

あのサキエという未亡人の受けた理不尽な処遇。あの富樫という軍曹が受けた扱い。彼と一緒に処刑された上等兵と二等兵が受けた扱い。国家から押し付けられた逃れがたい不条理。あるいはその後にいる何百万という無告の死者たちの無念・・・、そういうことに対してちゃんとオトシマエがつけられているのだろうかということ。どうもこの国はつけるべきオトシマエをほったらかしにして、前に進もうとしているのではないか、前に進んでいるつもり。の道が、実はいつか来た道ではないのか。・・・以下略・・・

文化とは何か？（会場からの質問に答えて）

文化といえば、聞こえはいいですが、文化というものはその中に、映画もあれば、小説もあり、音楽も絵もある。僕は文化というものは本質的には権力に対して反逆するものだと思います。権力におもねり、しつぽを振るものなんて文化としての価値はないと思うんです。権力は極めてリアルな現実です。人びとを管理し管轄しそして一つの方向へ進めていく。働きかける対象はあくまでも現実の状況です。

それに対して、ちよつと語弊があるかもしれませんが、文化はロマンです。文化はイメージーションをもとにして作られています。想像力です。だから、リアルな現実を基盤とする権力と、イメージーションを基盤とする文化は多くの場合、ぶつからざるを得ない。その結果、権力は文化を抑圧しようとする。権力と対峙し、異議申し立てをする文化に対しては、それを潰そうとする。

逆に政治が文化になってしまったら、つまり、政治が大衆に受けることをやって、文化ぶった顔をするようになることは逆に危険です。例えば、小泉劇場とか小池劇場とか政治が何々劇場と言われ出したらとてもヤバイと思わなければ

なりません。その最たるものが、「ヒットラー劇場」です。「ナチス劇場」です。これは見事にヒットラーという一人の男が、そして、彼の周りの人々が政治を、ある意味プリミティブな文化として世界を貶めました。そのことを映画として天才チャプリンが描きました。『独裁者』という映画です。『独裁者』の中でヒットラーを演じたチャプリンは、地球儀を風船にして弄びました。アウシュビッツも劇場のひとつだったのです。

「小泉劇場」だとか「小池劇場」とか、政治が受けることを望んで、そして、受けるように、受けるように、支持率が、あがるようにしたら、行きつく先は「ヒットラー劇場」となります。非常に極端な言い方ですが、僕は論理的必然として、そういうことが、あるんだと思います。

政治は現実の地面に愚直に足をつけてやっていけばいい。そしてその分、文化が思い切って自由に想像力の羽を伸ばして、権力と対峙し、時には権力に反逆し、「人間そうそうお前たちの思い通りにはいかないよ」と。それをやり続ける国だけが、文化国家といえるのではないでしょうか。そして僕たちの憲法は、そのことをはつきりと、保証してくれなければならぬでしょう。そう思います（拍手）